

## 第二回日中合同熱測定シンポジウム報告

(阪市大理 村上幸夫)

月日の経つのは速いもので、第一回日中合同シンポジウムが中国浙江省杭州市の浙江大学で開催されてから4年の歳月が流れている。当時の中国側の熱意と努力には感謝の意を表わさねばならないと考えてきましたが、今度、組織委員長である阪大 菅宏教授の御盡力で第二回合同熱測定シンポジウムが近畿大学11月ホールで1990年5月30日から3日間開催された。最初は5月29日からの予定であったが中国側参加者のVISAの都合で丸1日遅れることが5月1日のプログラム委員会の直前になり判明するといったあわただしいなかでプログラムの作成や会期中の日程の打合せなどが行われた。

中国側参加者は中国全土から選抜された18人(都合で2人取止め)であり、一方、日本側は発表者を含め約50人、これに加え、特別参加として Battino教授(米国)が出席した。

中国側参加者は5月29日午後 大阪国際空港から宿舎である近畿大学ゲストハウスに入り、夜は歓迎パーティが開かれ、雰囲気盛り上がりと同時に現地委員長である高木定夫教授、現地委員の木村隆良博士(ともに近畿大)の御苦労が始まった。

シンポジウムは5月30日9:40 菅教授の開会の挨拶に続き、日本熱測定学会 谷口雅男会長、中国化学会「溶液化学、熱力学、熱化学、熱分析」委員会 劉瑞麟委員長(北京大教授)が日中両国を代表して挨拶され、直ちに午前7件、午後3件の口頭発表とポスター12件の研究発表が行われた。発表形式は前回と同様、中国側と日本側の発表が交互になるように組まれた。要旨集の構成も前回と殆んど類似であったが、前回口頭発表の順序が明らかでなかった点はプログラムの配布と記号による要旨の掲載場所の明示で改善された。第2日は口頭発表4件が行われ、午後は中国側全員と日本側有志により古都奈良へバスによるエクスカージョンが行われた。第3日は口頭発表10件とポスター12件の研究発表があり、引き続き菅教授、嚴文興教授(浙江大)の挨拶でシンポジウムは無事終了した。

中国側参加者の半数近くの研究者が溶液の研究をされ、発表も溶液関係のものが多い印象を受けれるが、これはレポーターと専門分野が等しい故だろうか? 我国では溶液の熱物性研究は以前に比べ下降気味で、この分野の復活を願っているだけに奇妙な感じをいただいた。中国側も上記のような事情を知っており、中国におけるこの分

野の将来にある程度危機感をもっていることが胡日恒教授(中国科学院化学研究所)との討論で判った。

プログラムの作成では発表の順序を出来るだけ系統的に類似した分野をまとめることにし、前回の問題点は改善された。シンポジウムの会期と高分子学会の年次大会が重なり、ポリマー関係を最終日に置かねばならなかったが、シンポジウムの会期が先述の中国参加者の来日遅れで順延されたことが幸いした。

当初予定していなかった山村雅一教授(東海大)による「Whole Body Calorimetry - A Measure of Circadian Rhythm」を急遽設定したが、このような飛入りの発表はシンポジウムを盛り上げるのに非常に効果的であった。発表内容は生物の生活リズムと熱測定という大変面白い取り合せであり、約20年位前、サーモモジュールを成熟体とした動物用熱量計をNASAが開発したとい



中国側代表劉瑞麟教授の開会式の挨拶



組織委員長菅宏教授の開会の挨拶

う話を思い出し、興味深く聞くことが出来た。発表後の討論も他の発表に対するよりも活発であったように思う。これは山村教授の優れた話術によるばかりでなく熱測定の応用例として一つの方向を見出したことによるのではないだろうか。この分野での熱測定の利用がますます盛んになること期待したい。

研究発表の内で特に印象に残ったのは第3日の胡教授講演である。最近2、3年世界中で常温核融合の成否について話題になっているが、常温核融合の検証手段に溶液カロリメトリーが利用され、K. N. Marsh教授(米国A&M大)らの報告がある。胡教授の発表も類似した方向であるが、カロリメトリーの基本に関わる問題について発表された。即ち、核融合に伴う熱異常を良く検出できるように熱量計が設計されているかどうかよく吟味することは我々専門家にとっては重要なことである。この点で胡教授の発表は特に感銘を受けた。

全般的にみて今回の中国側の発表の研究レベルは前回に比べ格段の向上があったことを認めざるを得ない。前回のシンポジウムでもこのことは予想されたが、昨年天安門事件後のIUPAC主催の化学熱力学とカロリメトリー会議が北京で開催され、この会議に出席したときにも感じられた。現在の中国では政治的な締めつけはあろうが、少なくとも研究面ではあまりその影響はなく国際会議に出席する機会が多いようである。Banquet や“サヨウナラ”パーティなどの個人的討論の場で彼等は盛んに共同研究の可能性の有無について質問していた。



中国側参加者

我々も共同研究を望むところであるが予算的裏付けが乏しくなかなか実現できないのは残念である。

今回のシンポジウムが日本側組織委員会をはじめ近畿大学の御好意と高木、木村両先生の献身的な御世話で盛大裡に終わったことは第一回シンポジウムでの中国側の熱烈的な歓迎に答える意味でも、また、研究を共にする両国科学者達の親睦が更に深まった点でも非常に有意義であった。

閉会の挨拶で嚴教授は第三回シンポジウムを中国の古都西安で開催の予定であるので多くの日本側研究者が参加されるよう招待された。両国の熱測定研究が益々盛んになるように、更にアジアの研究者が集まるようなシンポジウムに発展するためにも日本からの参加者が多いことを祈りたい。